潮　流

2023 年はどんな年？

取締役会長　大竹　和彦

新年あけましておめでとうございます。農林中金総合研究所は今年も皆さまのお役に立つ情報の発信につとめて参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年を振り返ると様々な出来事があった。中でも 2.24 ロシアのウクライナ侵攻は歴史に刻まれる暴挙である。昨年の漢字に「戦」が選ばれたことはその象徴であろう。ちょうど一年前の本誌「潮流」にて 77 年周期（明治維新→第二次世界大戦敗戦→2022 年）で何か大きなことが起こるのではないかと書いたものの、まさかこんなことが実際に起こるとは全く予想しなかった。いまだに二つの国の間で戦闘が続いており、厳冬に突入しても解決の糸口はみえていない。

この戦争により、改めて大きな課題として認識されたのが二つの安全保障、エネルギーと食料の確保である。これらはわが国にとり以前から課題として認識されてはいたものの根本的な対応策ができていないなか、危機を目のあたりにして課題の重要性と解決の緊急度の高さを認識するに至った。経済大国となりお金さえあれば何でも買うことができるとの思い込みが間違いであったことに今更ながら気づいたのだ。近時これら安全保障に対する議論が活発になされ真摯に向き合うようになってきたことは不幸中の幸い、特に食料安全保障については当研究所として数次にわたる緊急フォーラムの開催などを通じ訴えてきたことが少しは寄与したのではないか。国民的議論のさらなる深まりとともに検証が進められている食料・農業・農村基本法の改正に危機意識が十分に反映されることを期待したい。

2023 年はどんな年になるだろうか。今年注目すべきテーマのうち二つについて考えてみる。

第一は「気候変動」への対応である。昨年 11 月エジプトで開催された COP27（国連気候変動枠組み条約第 27 回締約国会議）は、地球温暖化で引き起こされる「損失と被害」に対応するため途上国支援の基金を創設することで合意した。当初は地球温暖化による自然災害の多発や深刻な食料危機を訴える途上国と先進国との間の対立が鮮明であったものの、最終的に採択した「シャルムエルシェイク実施計画」では地政学的状況などを理由に気候変動対策を後退させてはいけないとの決意が示された。分断を避け国際協力の強化を打ち出したことは一歩前進である。

また、途上国の農業支援の国際的枠組み「FAST（食と農の持続可能な変革）」が創設され、資金援助・技術支援・政策支援の 3 分野で途上国の課題解決に向けた取組みがスタートする。わが国のノウハウや知見の提供が途上国の食料にかかる課題解決に貢献することを期待したい。

今後は脱炭素・低炭素経済へ移行する過程で生じる「移行リスク」に関しより実現可能性の高い対応が迫られてくる。黒か白かの議論ではなく黒から白への移行シナリオをどう描くか、その蓋然性を高めることが重要になる。資金供給においては官民をあげた GX（グリーン・トランスフォーメーション）投資が具体化し、ESG 投資やファイナンスのグリーンウォッシング回避に向けたタクソノミー規制強化などの動きが本格化してくる。

また、炭素の吸収という観点ではカーボンクレジット市場の拡大が予想される。世界では民間が主導する多くのカーボンプロジェクトが実施されクレジット市場が発展しつつある。プロジェクトの評価やカーボンプライスの適正性の確保などまだまだ課題があるが、わが国においても森林・林

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載･複製を禁じます　https://www.nochuri.co.jp/

業をはじめとする第一次産業との関連が深いだけに健全な市場の発展に期待したい。
加えて、生物多様性についての議論が急速に深まっている。先に開催された COP15（生物多様性条約第 15 回締約国会議）では「昆明・モントリオール生物多様性枠組み」を採択、「30by30」（30 年までに地球上の陸と海をそれぞれ 30%以上保全する）はじめ 23 項目の目標を盛り込んだ。生態系保全ための基金の創設も合意、ここでも先進国と途上国の対立を乗り越え一歩踏み出した。今後 TNFD の議論が本格化し開示のあり方が問われていくこととなろう。

第二は「人的資本経営」の進展である。人材育成が重要であることは経営者なら誰もが口にするが、厳しい収益環境のなかで人材への投資が後回しになりがちである。人材育成への支出は会計上はコストであるが、同時に投資でもある。長期的な収益向上は人材なしでは考えられない。今後は人的資本投資のあり方について非財務情報の一つとして開示化が進むであろう。
ところで、先般カタールで開催されたサッカー・ワールドカップにおける日本代表チームの活躍は見事だった。颯爽と走り抜けた「サムライ・ブルー」の風に多くの国民が歓喜の声をあげた。目標としていたベスト 8 には届かなかったが、世界と戦うことができることを証明した。優勝経験国のドイツ・スペインを破ったことは奇跡だとの見方があるが、むしろ必然といった方が正しいのではないか。代表選手の多くがヨーロッパのクラブチームに所属しプレーしており、日頃戦っているあるいは同じチームに所属する見知った選手が国別の対抗戦に出ている、いわば日常の延長線上にワールドカップの舞台があったのだと思う。サッカーはチーム戦であるが、個々の選手のレベルアップがあってこそ世界に伍していける戦略の策定が可能となる。

組織の人事戦略についても同様であり、将来の経営を支え発展していく原動力となる人的資本をいかに充実させ個々の従業員のレベルアップを図っていくかが重要である。労働市場が流動化しせっかく育てた人材が流出してしまったとの声をよく聞くが、辞める自由がある以上やむを得ないという前に、従業員の満足感の醸成にどれだけつとめたか、デジタル技術が進みリモートワーク、ワーケーション、多地域就労などができるようになったことへの対応をどこまで進めたか、言い換えれば新しい働き方の選択肢をどう示すか、がポイントである。特に若い世代は SDGs などの社会的課題の解決に貢献したいという意欲が強い。パーパス経営は社会への表明と同時に従業員へのメッセージでもある。一緒に働きたくなる組織づくりは人事戦略であり経営戦略そのものである。

ちょうど一年前、願望を込めて 2022 年を「with コロナ元年」と名付けた。まだまだコロナとの戦いは続いているが、ワクチンの開発・普及が進んだこともありコロナウイルスと共生していくことがはっきりと認識されてきていると思う。今年こそ経済社会活動がより活発化することを願う。

最後に、おすすめの書籍を三冊紹介したい。「世界食料危機」（阮蔚、日経プレミアシリーズ）、「投資家の思考法」（奥野一成、ダイヤモンド社）、「天地の防人」（伊本克宜、KK ベストブック）。食料安全保障についてグローバルな視点から考える際、プロ投資家の企業分析の思考法を知る際、農政の歴史や課題を大局的に整理する際、それぞれお役に立つこと間違いなし。

2023 年が皆さまにとり有意義な一年になりますよう祈念申し上げます。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます https://www.nochuri.co.jp/